



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.170
2017.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第18回 ● 「コロボックル風俗考」への転換

坪井正五郎が「西ヶ原貝塚探求報告」の「其七」(明治28年1月)を最後に(未完)のまま中断した事情は、その頃までには椎塚貝塚や阿玉台貝塚など(含む亀ヶ岡遺蹟や福田貝塚)の発掘成果が夥しく、明治28年4月からは考古学に替わり人類学としての「コロボックル風俗考」連載を開始するからである。坪井正五郎の考古学の到達点は西ヶ原貝塚での遺物の分類と統計により付与する「土器様式名称」であるものの、その方法は本草学的な分類の精緻を極め、更に難解な手続きも追い打ちをかけるため、人類学教室員のみならず、今日学史研究を自負する学徒にもその理念すら理解されることはなかった。

西ヶ原貝塚では石器と土器の分類を基準とし、問題の所在は列島規模で蒐集した他遺蹟との関係を追求比較議論から類似関係の意義にまで発展・明示されたが、更に椎塚貝塚で見出された多くの完形土器の形態学的標本性、加えて多数の土偶や骨角器・貝製品など石器と土器以外にも生活上の日常・非日常機能や用途面、椎塚貝塚と阿玉台貝塚の土器群の相異認知に至り、**往時の集落や地域社会の在り方、その先には列島の石器時代文化と向き合う準備が整った、と考古学を現状認識する。**モースにより幕開けされた日本考古学は一気呵成に総合の学へと展開する。

「コロボックル風俗考」とは**モダンなレトロ**による**科学の擬態**、未来の企画展であろう、と評価したのは第12回であるが、モダンとは最新考古学データ、レトロとはアイヌの口碑など民俗学や他の未開民族からの類推、科学とはデータ分析における網羅性体系性事実性、擬態とは表現の可視化を意味している。未来の企画展と裁断したのは今日の企画展

ではそれらのいずれかが欠落し、「コロボックル風俗考」に接近し得る企画展にはこれまで遭遇したことがないからである。

坪井正五郎は「コロボックル風俗考(第一回)」の「緒言」において、「コロボックルとは何ぞ」、「コロボックルの意義」、「石器時代遺蹟」、「石器時代遺物」、「コロボックル風俗」、「未開人民の現状」について丁寧な解説を加え、続く「コロボックル風俗考の主意」では「コロボックルの風俗は**第一、アイヌの伝えたる口碑、第二、本邦石器時代の古物遺蹟、第三、未開人民の現状の三種の事柄に基いて考定すべきもの**」と明快に先史考古学と民俗学・民族学の統合を諭す。その目的は「本邦古代住民コロボックルの生活の有様を明にするのみならず、**此人民と他の人民との関係、此人民の行衛迄も明にせんとする**」とコトの子細までも穿つ近代理論考古学としての高みを目指し、そうした高みを「風俗」との用語で代表させる**パブリック・アーケオロジー**のセンスには驚嘆しかないであろう。

ここでは「コロボックル風俗考」の詳細に触れるのが目的でなく、「コロボックル風俗考」に果たす加曾利B式の役割から坪井正五郎の研究戦略について述べるにとどめる。

先ず、「身体装飾」、「衣服」では椎塚貝塚の山形土偶体部や亀ヶ岡遺蹟の遮光器土偶体部、「冠り物」、「覆面」では椎塚貝塚の山形土偶頭部、「遮光器」は亀ヶ岡遺蹟などの遮光器土偶頭部が挿図の主體的配置を飾っており、これだけ見ても坪井正五郎の椎塚貝塚に向ける学的眼差しは西ヶ原貝塚の「土器様式名称」を超えている。

加曾利B式土器は「容器」の「土器形状」の図版で大森貝塚や福田貝塚などの完形土器

を縮尺不同で示し、「土器模様」の図版では大洞式が多く、大森貝塚や椎塚貝塚も採用される。こうした土器の選定状況から坪井正五郎が構想する本邦石器時代像は明確で、**関東の加曾利B式と東北部の大洞式を中核とし、不足部分を北海道遺蹟や関東北の中期遺物で補う構図である。**

そしてその構図が如何に戦略的配置であるかは、明治28年11月の「北海道石器時代土器と本州石器時代土器との類似」及び明治29年4月の「異地方発見の類似土器」の発表まで俟たなければならぬ。この両論文こそは「コロボックル風俗考」の**考古学的理論基盤**とすべき考察で、西ヶ原貝塚で実践した「**類似の形態連繫論**」の真骨頂でもある。

蛇足ながら、西ヶ原貝塚の加曾利B式はどのような評価の場面で登場するであろうか。因みに西ヶ原貝塚は第一回の「石器時代遺蹟」において「多量の貝殻積み重なりて広大なる物捨て場の体を成せる」貝塚の好例として紹介される。土器は第九回において「美術」として第22図の突起が採り上げられ、他の遺蹟例も含めて中後期の突起を配した上で曰く、「**其形其紋実に名状すべからず。コロボックル美術の標本たるの価値充分なりと云ふべし。**」と。



▲第22図 西ヶ原貝塚の加曾利B式突起

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 「コロボックル風俗考」への転換(第18回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第11回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第163回) 深川裕二 …3
■考古学者の書棚 『播磨国風土記』 中川 渉 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第11回) 間壁 忠彦・間壁 霞子

4. 石棺の石材(2)

前回にも記したように、気軽に始めた岡山県出土の古墳時代で、丁寧に加工された20余例の石棺石材産地同定に関しては、結果を既に古く1974年9月発行の『倉敷考古館研究集報9』で発表。要約すれば前回記したように、僅か数行にすぎない。だがその1件1件の同定についての過程は、今でも鮮明に思い出すことは多い。発表までに3年の歳月を要したが、それでも精一杯のことであった。調査は思いもかけず、古墳時代石棺の存在する地域全体に涉って、幾度も足を運ばざるを得ない状況になったからである。

岡山で最初に、遠隔地の九州阿蘇山周辺産の石材が用いられたことを確認した石棺は、赤磐市山陽町の小山古墳の、舟形石棺であった。舟形石棺といえば、割竹形石棺と共に、加工された石棺の中では古いタイプの石棺とされてきた。しかし九州にも四国にも山陰にもかなり多い棺形態だった。特に岡山県とは瀬戸内海を隔てただけの、最も近い四国の讃岐・香川県には、割竹形木棺を石材に替えたとされている割竹形石棺や舟形石棺の出土が古くより多く知られていた。それら石棺を製作した石材産地は、西讃岐では国分寺町の鷲の山、東では津田湾に近い火山(ひやま)とされてきた。

岡山の舟形石棺は、なぜ九州よりはるかに近い、四国の石材でないのか、岡山には四国の石材の石棺は無いのか、ということもあり、四国鷲の山や火山の石材産地の資料採集と共に、改めて四国の割竹形や舟形の石棺本体の石材点検ともなった。

従来より著名であった香川県内の割竹・舟形石棺は15例ばかり。その中で、4例は東讃の火山産石材、9例は西讃の鷲の山産石材、これらはそれぞれ石材産地に近いところに存在した。最も西の観音寺市に存在した2例は九州阿蘇山系の石材であった。これも言わば九州寄りといえなくはない。

半世紀近くも昔の当時だが、石棺形態と古墳の関係についての研究は、すでに多くの先学によって進められ、石棺は近隣の石材で制作されたと考えられていた。また最も古い石棺は、大形古墳の確立した奈良盆地を中心とした前期古墳の棺である、割竹形木棺を石に加工した割竹や舟形石棺とされ、その重要な証拠として、大阪府柏原市安福寺所在の石棺が考えられていた。この棺は周辺の古墳からの出土とされている。であればこの石棺の石材は後に多くの石棺を製作している、二上山あたりの石材と考えられていたのであろう。当時、露天で見える石棺だが、凝灰岩とだけされていた。

これは割竹形石棺の蓋だけだが、私たちは注意して観察し、四国香川県西部の、鷲の山の石材と確信した。しかも石棺の形態は、香川県に集中している割竹・舟形石棺形態そのままであった。この棺は少なくとも、四国(讃岐)の石でその地元の石工によって製作されたもので、優れた石棺加工の技術は、近畿でなく、四国にあったといえた。

しかもこの安福寺からは、大阪湾岸から大和へ通じる重要な通路とされている大和川沿いの、近くに望める山稜上には、著名な松岳山古墳がある。考古学を学ぶものには説明は不要であろうが、ここには割竹形石棺に続いて現れる、長持形石棺の祖形と考えられている、大形で加工を加えた組合式石棺が露

呈していた。この棺を構成した石材は、蓋と底石は花崗岩で、縄掛け突起などの加工を加えた側石は、鷲の山産の石であった。

こうした事実が判明してきた頃には、実は、私達はいま一つの岡山県に東隣する、現在も著名な石切場、高砂市亀山や、その周辺の多数の石棺所在地にも、足を運んでいたのである。この周辺は長持形石棺に限らず、後期古墳期に盛行する家形石棺も、濃密に分布する地域であった。

岡山県では、先の小山古墳に近接した朱千駄古墳で、典型的な長持形石棺が出土している。両古墳は共に、岡山県では第3位ながら、全長190m、周辺には水を湛えた周溝を持つ、大前方後円墳・両宮山古墳と一群を成す古墳でもあった。しかしこの朱千駄古墳の長持形石棺石材は、小山古墳のものとは全く違う凝灰岩だ。これはいったい何処の石材か。もちろん岡山県には無い。長持形石棺といえば兵庫県も含め大阪・奈良一帯の著名な大古墳出土も知られるが、関東にも九州にもある。

とりあえず近くで長持形石棺の多い兵庫県の石棺石材と考えられている高砂市の亀山、古来より有名な「石宝殿」のある地を訪れていたのである。そうして長持形石棺は、朱千駄古墳の石棺だけでなく、兵庫県内はもちろん、近畿周辺で目にするこの出来る同種の石棺は、全て亀山石ということに気付いてもいたのだ。しかもその一方で、明らかに九州の石材による舟形とか、刳抜家形とも言える石棺が、近畿地方に運ばれている事実も分かってきた。

これは岡山県だけの問題ではない、古墳時代の政治的関係をも背景にした疑問だ、と気付いた時から、全国に視野を広げることになってしまったのである。それは机上や空論の世界ではない。あくまで一個一個の試料を間違いなく同定した上での結論でなければ、自分自身でも納得がいけないということであった。

中国地方の各県はもちろん、九州・四国・近畿から北陸・東海・関東・石棺石材の産地とされてきた場所とその周辺の石棺所在地へは、私ども二人の内の一方だけで出かけたものが多い。これらは倉敷考古館での仕事とすべて平行しており、僅かな休日や時間を作ったのものであった。調査費・研究費などというような、気の利いたものなど、考古館では勿論、どこにもない状況下であった。

間壁忠彦 略歴

1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就美女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 163

佐敷城跡 ～熊本県芦北町

深川 裕二

「あなたは佐敷城ば掘らんばんと！」

平成8年4月、芦北町立図書館に司書(臨時職員)として配属された私は、地元神社祭礼の宴席で酔った上司からそのように告げられ、面食らってしまった。なぜなら、学生時代に東洋史専攻でインドシナ半島の近代化をテーマにしていた私は、学芸員資格こそ持っていたものの、発掘調査については未経験のど素人であったからだ。3ヶ月後、上司の言葉通り佐敷城跡調査の担当を任せられ、それから現在に至るまで21年間も関わることになることは、当時は夢にも思っていなかった。

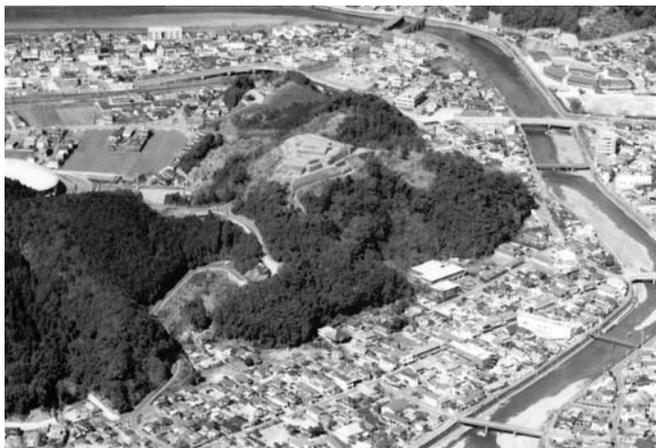
調査担当となった佐敷城跡は、熊本県の南部、不知火海(八代海)に面する葦北郡芦北町大字佐敷及び花岡に所在し、城域は城山と呼ばれる丘陵一帯で、現在は陸地化されているが城が存在した当時、佐敷湾に突き出た半島状の地形であった。

16C後半、肥後北半国を領していた加藤清正が飛び地領であった葦北郡内の領地支配のため、肥後南部の海陸交通の要衝であった佐敷に築城したもので、肥後と薩摩との国境及び球磨郡の相良氏を押さえる役割を持っていた。

文禄元年(1592)、島津家臣の梅北国兼の軍勢に城を一時占拠される事件(梅北一揆)の舞台となり、慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いの余波として島津・相良両軍による攻撃を受け、その後、肥後国内の有力支城として整備されるが、元和元年(1615)の一国一城令により、鷹ノ原城・内牧城とともに廃城となり、さらに寛永年間に再度破却されている。

大正年間に桜が植樹されて以降は花見の名所であり、昭和53年には都市公園として整備され、地域にとってシンボリック存在であった。

都市公園整備時の発掘調査により、山頂の本丸周辺に石垣が存在することが確認され、城跡は芦北町史跡に指定された。平成元年以降、観光振興策として本丸に天守を建設する動きが官民挙げて推進され、その事前調査として平成5年から発掘調査を本格的に開始した。この頃から天守建設派と調査継続派による論争が起き、途中、行われた町長選挙は「佐敷城攻防戦」として新聞紙上を賑わせることとなった。この選挙の結果により、建設業者との契約まで終わっていた天守建設計画は石垣復元へと整備方針が大きく変更された。



▲佐敷城跡全景

私が調査担当になったのは、町の方針が調査継続・石垣復元になり、更に「天下泰平国土安穩」銘鬼瓦の出土が新聞報道された後で、町民に遺跡調査の重要性が浸透してきたこともあり、発掘調査自体は国の補助を受けながら着々と進められていた。

そんな中、私は晴れた日は当時、調査指導をされていた八代高専の佐藤伸二先生に発掘調査のイロハを、雨天時は作業員さんたちに整理事業のやり方を教わりながら、がむしゃらに作業に没頭していた。今からすれば、十分に情報を拾い上げられなかった遺構、遺物も多くあったと思うし、悔いも残る。しかし未熟なりに、充実していた時期でもあった。

佐敷城での発掘調査は平成14年度の調査最終年度まで担当し、平成15年度からは報告書作成の作業が始まった。出土遺物の多くは破城時に建物上から廃棄した屋根瓦の破片で、量はミカンコンテナにして約2,000箱以上、鬼瓦や軒平瓦、軒丸瓦等の和瓦のほか朝鮮半島系瓦など種類も豊富で、一人、収蔵庫で毎晩遅くまで瓦の分類を行っていた。空から降ってきた瓦に埋もれる夢を見たのも、この頃であった。

平成16年度に報告書発刊後は他の遺跡を調査しながら国指定に向けての事務を担当し、平成20年3月に国史跡に指定。現在、城跡一帯は歴史体験の場として学校の授業等でも用いられ、特に城郭を持つ本来の機能を説明する際に、地元有志で結成された葦北鉄砲隊の火縄銃演武とのコラボレーションを行っているが、火縄銃発砲の轟音や煙、火薬臭、空気振動などを体感することで、その説明効果は高く、参加者からの反応も上々である。平成10年に保存目的で整備した石垣は、新規石材を積み過ぎとの評価を受けることもある。しかし、整備当時の状況を知る者としては「よくぞ、この整備に落ち着いてくれた」と思うし、また史跡整備を試行錯誤した実例として、今後も検証していかなければならない。先の熊本地震ではほとんど損壊せずに頑張ってくれた。

しかし、近年は風水害による災害や史跡内の樹木管理等、維持管理面で何かと頭を悩ますことも多い。また、出土した朝鮮半島系瓦のうち、光芒線状文様軒丸瓦が韓国・蔚山慶尚左兵營城跡出土瓦と同じ工具で製作さ



▲光芒線状文様軒丸瓦

れた同範瓦であることが、一昨年、確認された。この瓦の伝播ルート解明は今後の課題である。

このように調査が終了してから10年以上経った今でも佐敷城跡は、調査・管理両面において新たな問題を提起してくれる。そして、佐敷城跡を担当しなかったら会うことも無かったであろう、多くの人たちと知り合えたことは、私の大きな財産である。

最初は嫌々であったが、佐敷城跡という遺跡に長年関わったことは、私の人生にとってかけがえのない出来事となっている。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは手柴由美子さんです。

考古学者の書棚

「播磨国風土記 ーはりま1300年の源流をたどるー」

播磨学研究所 編／神戸新聞総合出版センター (2016)

中川 渉

和銅6年(713)、元明天皇による「風土記撰進の詔」を受けて、各国の地理や物産、地名の由来、説話などをまとめたレポートがいわゆる「風土記」です。現在、まとまった形で残る風土記は「出雲・播磨・常陸・豊後・肥前」の五ヶ国のみですが、引用された逸文が四十数ヶ国分知られているので、編纂は全国で進められたのでしょうか。中でも『播磨国風土記』は最も早い段階の霊亀元年(715)頃に成立したと言われ、平成27年(2015)には編纂1300年を迎えました。

そうしたことによる関心の高まりもあってこの数年、風土記に関して新たな視点から掘り下げた書籍の出版が相次いでいます。その中から今回は、播磨学研究所編の『播磨国風土記 ーはりま1300年の源流をたどるー』をご紹介します。この本は、平成27年に同研究所で開催した特別講座の講義内容をもとにまとめられたもので、文献史学・考古学の第一線の研究者による論考は、現時点における『播磨国風土記』研究の到達点を示す内容となっています。

冒頭の“シンポジウム「五古風土記」の魅力”は、各地域の研究者に現存風土記の特色を紹介してもらい、その全体像を俯瞰しようという試みです。風土記というと神話・説話の宝庫で、特に神話は出雲の専売特許と思いがちですが、いわゆる出雲神話はほとんどが『古事記』『日本書紀』に取り込まれていて、『出雲国風土記』では「国引き神話」が目立つ程度です。実は神話・説話の豊富さは『播磨国風土記』が一番で、その読み解き合戦が本書でこのあと展開されていきます。

まず筆者の専門分野である考古学からの2編について取り上げます。“播磨の渡来人”の亀田修一氏(岡山理科大学)は、日本最古段階の須恵器窯である「出合窯跡(神戸市西区)」の調査をきっかけに、考古遺物から渡来人の探索を続けてこられており、本論考は、播磨における古墳時代～奈良時代の朝鮮半島系遺物のユーティリティな集成ともなっています。

岸本道昭氏(たつの市教育委員会)は“風土記の考古学”の中で、古墳時代の遺構・遺物を風土記の記述に重ねて解釈する、という試みを行っています。風土記に記された伝承の多くは古墳時代の事柄である、とは理屈の上では理解していたつもりなのに、頭の芯では全く結びついていなかったと、これによって気づかされました。お2人の研究は、考古学の「モノ」を風土記の「コト」で読み解く、新しい可能性を提示してくれているようです。

次に、文献史学の論考からは、坂江渉氏(ひょうご歴史研究室)が“「H型」交通路で結ばれる地域と中央権力ー東播・西摂の国境地帯”の中で注目している「湯ノ山街道」について触れてみましょう。この道は、六甲山の裏側を通過して摂津の「昆陽野」と播磨の「印南野」を結ぶ山陽道のバイパスで、そのルート上にある「志深屯倉(しじみのみやけ)」はオケ・ヲケ2皇子(のちの仁賢・顕宗天皇)の伝説の舞台として知られます。同地にある「窟屋1号墳(三木市)」の出土遺物や、風土記の説話・地名などから、坂江氏はこのルートの開拓・掌握に、

葛城氏とその後継者である蘇我氏が関わったと考えています。

上記の説と呼応するように、高橋明裕氏(立命館大学)は“ナビツマ伝承の舞台となった印南野の歴史的重要性”として、東播磨の印南野地域が古代政権にとって重要な意味を持つ場所であったことを、風土記の記述から読み解いています。「ナビツマ伝承」とは、景行天皇(大帯日古命)につまどい(求婚)された印南別嬢(イナミノワケイラツメ・吉備比売の娘)の墓が比礼墓(加古川市日岡丘陵のひれ墓古墳)とされる、ということでも有名な説話です。印南郡の南にある小島「ナビツマ」に隠れていた印南別嬢を景行天皇が見つけ出して二人は結ばれるわけですが、これをヤマトと吉備・播磨勢力との政治的関係の象徴と解釈しています。

そして古市晃氏(神戸大学)は、“ヤマトとハリマー風土記の政治学”で、『播磨国風土記』の渡来人・外来者の記事に対して細かく検討を加え、葛城・吉備・紀伊の連合勢力が瀬戸内海交通に深く関与していた証跡を導き出しました。

高橋氏と古市氏は、坂江氏が研究コーディネーターを務める「ひょうご歴史研究室」の客員研究員で、平成27年に兵庫県立歴史博物館内に開設されて以来、『播磨国風土記』を研究テーマの1つとして研究に取り組んできています。それゆえに3者の主張は互いに呼応し合い、本書に通底した主題となっています。

筆者にとっても、印南野の重要性が指摘されたということは、なかなか心穏やかならざるものがあります。というのも以前に発掘調査した「長坂寺遺跡(明石市)」は文献に表れない「(仮称)邑美駅家(おうみのうまや)」であり、『続日本紀』に記載された聖武天皇の印南野行幸の際の「邑美頓宮」にも関わるともかもしれないと評価される遺跡で、まさに「考古学」と「文献史学」が垣根を越えて、焦点を結ぼうとしているように感じられるからです。

昨年度には兵庫県立考古博物館において、『播磨国風土記』複製品(卷子本)が全幅特別陳列され、みなさんに現存テキストの文字を目にもらう機会がありました。播磨学研究所所長で、ひょうご歴史研究室の参与でもある中元孝迪氏は、『播磨国風土記』は際立って人間臭く興味深い内容をもっている。この「記憶遺産」ともいうべき物語をもっと市民化できないものかと考えて公開講座を開催したと語られています。その狙いの通り、本書は格好のハンドブックとなっているのではないのでしょうか。

アルカ通信 No.170

発行日 2017年11月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp